魔法使いプリン

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いプリン

【Ｎコード】

Ｎ７４０３Ｊ

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

２０枚完結予定。ただいま、半分。

1

プリンは魔法使いであった。なんて言うと、さぞかし色々な魔法を使えるのだろうと思われるかもしれない。しかしながら、プリンは魔法小学校でも劣等生である。魔法の成績がすんごく悪い。だから、失敗してばっかなんだ。

「ねえプリン。ジャスコに買い物に行こうよ」

「いいよ」

プリンと友達のポテトはそれぞれ箒(ほうき)に股がった。

「ギョウセイカイカク！」

ポテトは呪文を唱え、ぴゅーんと飛んで行った。

「ようし。あたしも。ギョウセイカイカク！」

ぴくりともしない。

「あれ？おかしいな。ギョウセイカイカク！ギョウセイカイカク！あーっ。チキショーッ」

電柱の陰から鳩山由紀夫首相が現れた。

「呼びましたか？お嬢さん」

「宇宙人、出てきちゃった！」

仕方ないので、プリンはバスに乗って、ジャスコまで行った。車内、魔法使いじゃない女の子たちにくすくす笑われていた。箒(ほうき)を抱えていたからだろう。くすくすあの子落ちこぼれよ。飛べないのよ。なんて。チキショーッ！

「おそーい。プリン」

「ご、ごめん。ポテト」

ジャスコ店内での買い物は描写しやすいが（よく行くので）、下手なことを書くとジャスコに訴えられるかもしれないので、プリンとポテトはそのまま、少し離れたチャスコに行った。

「プリン。もうすぐバレンタインでしょ？誰にあげる？」

「うーんと。そうだねぇ。ひじ木にあげようかな」

「ええーっうっそー。ヒョロヒョロひじきに？」
「別に好きだからじゃないよ。いつも宿題手伝ってもらってるから」

2

ポテトは内心イラッときていた。
ポテトはひじ木のことが好きだからね！
二人してチョコ売り場へ回った。
「色々あるねぇ」
「迷うねぇ」
キムチチョコレートなんてぇのもある。メイドイン韓国。
と思えば、うんこの形をしたうんチョコ。バレンタイン商戦に四苦八苦するメーカーの人たちの姿が浮かぶ。
「あっこれすごい」
「うはぁ」
むちゃでかい板チョコ。畳一畳分くらいの大きさ。
「でも高いねぇ」
「ねえ」
二人は結局、普通のハート型のチョコを選んだ。
さて、会計を、という段で、二人は魔法を使うことにした。葉っぱをお札に変えてレジのおばちゃんに渡すことにしたのだ。
違法ですので、よゐこは真似しちゃダメだよ！
ポテトは成功した。しかし、プリンはやはり失敗した。途中で葉っぱに戻ってしまい、警察に通報され、留置場にぶち込まれた。
暗い暗い留置場の中。
「あぁあたしってホント、馬鹿だなぁ」
プリンは情けなくて涙が出てくる。
壁抜けの術を試みることにした。この術のポイントは、壁の向こうに自分がほしいものがあると想像することだ。それは食べ物でもいいし、異性でもいい。
プリンは、ひじ木を想像した。
しかし、何回想像しても壁に激突してしまう。そりゃそうだ。ひ

じ木のことをそれほど求めてないから。警官がくすくす笑っている。
ついには、意味がわからぬことに、ひじ木を留置場の中に招いてしまった。まさに魔法の無駄使い。
「プリンちゃん。ひどいや」
「ごめんね。ひじ木」
しかし、ある意味幸運といえる。ひじ木はむっちゃ魔法が上手い。

3

「ひじ木！何とかしてよ！」
「ええっそれじゃあ。それじゃあ。どこでもドア！」
「魔法ちゃうやんけ」
とにかく、外に出ることに成功した。
「あ、ありがとう。ひじ木」
「お礼なら藤子先生に言って」
「藤子先生。ありがと！」
プリンは空に向かって叫んだ。空で藤子先生がにっこり笑った。
そういう形の雲。
「ああ。ひじ木に借りができちゃったねぇ。お返ししないと」
ひじ木が顔を赤らめもじもじしてる。
「どうしたのよ。ひじ木」
「プリンちゃん！ボクにチョコちょーだい！」
プリンはええっと驚いた。まさか、ひじ木ってあたしのこと。ええっ。
「うん。あげるはあげるけど、ポテトがね。そのう」
ひじ木の顔が青ざめた。
「ポテトちゃんは勘弁！」
「何でよ？」
「去年、ポテトちゃんに手作りチョコもらったんだ」
ええっあげたんか。それで今年もチャレンジしてるってことはふられたのか。
「チョコに毛が生えてたんだよぅ」
ひじ木は今にも泣きそう。
そうか。聞いたことあるぞ。去年流行ってたな。チョコの中に自分の髪の毛入れると両思いになるってまじないが。
まじないってかホラー！

「い、いいじゃん。毛くらい」
「か、髪の毛くらいならいいよ。でも、その毛ちぢれていたんだよ！」
プリンはまだあそこに毛が生えてないのでよくわからない。
「怖いよ！」
「うっさい男子だねぇ」

4

プリンはひじ木の箒（ほうき）にまたがり、後ろに乗せてもらった。
「プリンちゃん。おっぱい当たってるよう。もう少し離れて」
「やだ。落ちちゃうもん。怖い！」
プリンは小学生だが発育がよく、けっこうボインなのだ。
プリンとひじ木は、プリンの家の庭に降りた。
犬のヨーグルトがわんわん吠えた。
「プリンちゃん。怖いよぅ」
「大丈夫だよ」
プリンはポケットから骨を取り出し、ヨーグルトにあげた。
「やったね！プリンちゃん。ありがとう！」
ヨーグルトは夢中で骨をしゃぶった。
「あぁでも骨だけじゃ物足りないワン」
ヨーグルトはプリンの足に股間を押しつけ腰をカクカク振った。
「やめて。痛い」
「はっはっはっ」
ひじ木は、オーマイガッと両腕を広げてため息をついた。
「痛い！ヨーグ！」
プリンはヨーグルトの頭を叩いた。
頭を押さえるヨーグルト。「くぅん」

5

その日の夜、ヨーグは犬小屋の中で悩んでいた。昼間、プリンちゃんといっしょにいた奴は彼氏に違いない。ちきしょう。ちきしょう。

ヨーグは犬の分際で生意気にも飼い主のプリンに恋していたのだ。ラブレターだって書いたことある。ヨーグは普通の犬よりちょっと賢い。鉛筆が使える。

しかし、しょせん犬。文字が書けない。ふにゃふにゃした線ばかり書いた恋文をもらってもプリンにとっちゃ何の話かわからない。まったく伝わってない。

ヨーグは、悲しくて悲しくて、友達のワン五郎にケータイした。

ぽるるるる。

「ワン」

「あ。もしもし。ワン五郎？オレ。オレ。ヨーグ」

「ワンワン」

「聞いてくれよぅ。実は今日プリンちゃんの彼氏がさぁ」

「ワンワン」

ワン五郎は普通の犬なので人間の言葉がわからない。ヨーグの言ってることなどわかっちゃいないだろう。

でもきちんとヨーグの愚痴を聞いてくれる。だから、ヨーグもつい話しちゃうんだろう。

「あーしゃべったらスッキリした。今日はよく眠れるよ。ありがと。ワン五郎」

「ワンワン」

その夜、夢でヨーグはプリンちゃんと腕を組んでデートしてた。夢なので顔は犬だけど、体は人間である。

「わぁヨーグ。この骨いいなぁ。買ってよ」

「いいよ。給料入ったし」

骨ってそりゃ、ヨーグ。お前がほしいものだろう。それにヨーグは別に就職してないので給料なんてもらってない。

でも夢たから別にいいのだ。

6

朝目が覚めるとヨーグは虚しい気持ちになる。夢がよかっただけに。

やはり今のままでは仮にプリンちゃんと結婚できたとしても所得がないので子供を養うことができない（ヨーグは犬なので結婚式に何百万円とかかることを知らない。また頭がアホなので、犬と人間がセックスしても生物学的に子供ができないことを知らない）

ヨーグは小説を何とかせねばなぁと思う。犬小屋の隅には原稿用紙が積まれてある。

無論、前述したように、ヨーグは文字が書けない。近所に住む引きこもりのたけし君の家まで行き、ヨーグがしゃべったことをたけし君に書いてもらっているのだ。

たけし君はヒマなのだ。ヒマすぎてたまに母親に暴力を奮う。

しかし、ヨーグがこの仕事を頼むようになってからたけし君の暴力が減ったので、おばさんから感謝されている。

ヨーグは首輪を外し、ジャンバーを着て原付にまたがった。

ぶるるんるん。

7

二丁目の交差点でヨーグは警察に止められた。
パトカーの中に連れ込まれた。
「お前、犬だろう。犬は原付に乗ってはいかんのだぞ」
ヨーグは悔しい。調書に「無職」と書かれた。不審なヤツが来たら吠え、雇用主が落ち込んでいたら多少疲れていても笑顔で慰め、寒い犬小屋での生活に耐え、まずい飯に耐え、がんばって仕事してるのに、無職。まるで、非正規労働者のようだ。
「てことは収入がないってことだよな。罰金どうすんだ」
「飼い主を呼ぶしかないね」
十数分後、プリンがヘリコプターで二丁目までやってきた。プリンはすでに箒(ほうき)で飛ぶ訓練を放棄し、科学の力に頼り始める。
「すみません。すみません。すみません」
「お嬢ちゃん。困るねえ。犬のしつけはしっかりしないと」
くそ。何がしつけだ。犬扱いしくさりやがって。あ。犬だった。なまじ言葉がしゃべれるのでたまに忘れてしまう。
ヨーグはヘリコプターの中に乗せられ飛んで行った。
「プリンちゃん。ごめんなさい」
「もう。ヨーグのバカ。お小遣いなくなっちゃった。もう今月は骨なしね」
「しゅん」
でも、とプリンはヘリを操縦しながら続ける。
「たけし兄ちゃんに聞いたよ。あんた、小説書いてるんでしょ」
え。プリンちゃん、知ってたのか。
「うん。まぁでもボク文字が書けないから、たけし君に書いてもらってんだけどね」
「何にしてもすごいよ。あたしなんて小説読むことだってできない。頭悪いから。ヨーグはすごいよ。がんばって新人賞とってよ。あた

し、応援してる」
「う、うん」
ヨーグはちょっと感動してしまった。大好きなプリンちゃんに応援してもらえるなんて鬼に金棒、ポルノ男優にコンドームだ。
小説が苦手なプリンちゃんでも楽しめるような小説を書きたい。まず、文字を書く練習しなくっちゃ。ヨーグは肉球を眺めながら決意する。
眼下に家が見えてきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7403j/

魔法使いプリン

2010年10月8日14時40分発行